かんのむし

花輪和一

私は幼い時
かんのむしと
いわれて
いました。

入選作品

あっ!!

またやったな
ほんとにおまえはおまえは

かんのむしのこじゃああ

おかあさんおかあさんんんんんん

また
つれて
いきなされ

2

波久礼駅
HAGULE
私は
町に
つれて
こられて
しまった。
かえりも
また、まど
ぎわに
すわれると
いいです。

この日、町は
とても
にぎやか
にぎやか

はり灸

チク

ガラリ

いいいらあっ
しゃああい
やせえええ
ドン

ギャッ
イ゛イ゛
イ゛イ゛イ゛

さあ
チ
さあ
さあ
グッ
ハリは
足、手の
指とツメの
あいだに
うちます。
はじから
はじまで
ブチ
チッチッチッ
チッ
チッ
チッ

チッ チッ チッ チッ チッ チッ チッ チッ チ

これをやればカンノムシというものがなおると思っているのです。

チッ
チッ
チッ
チッ

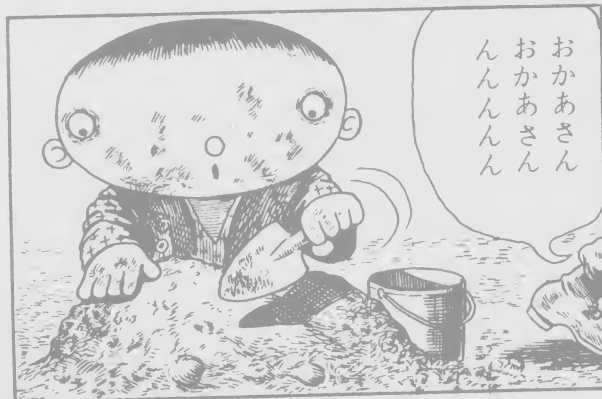
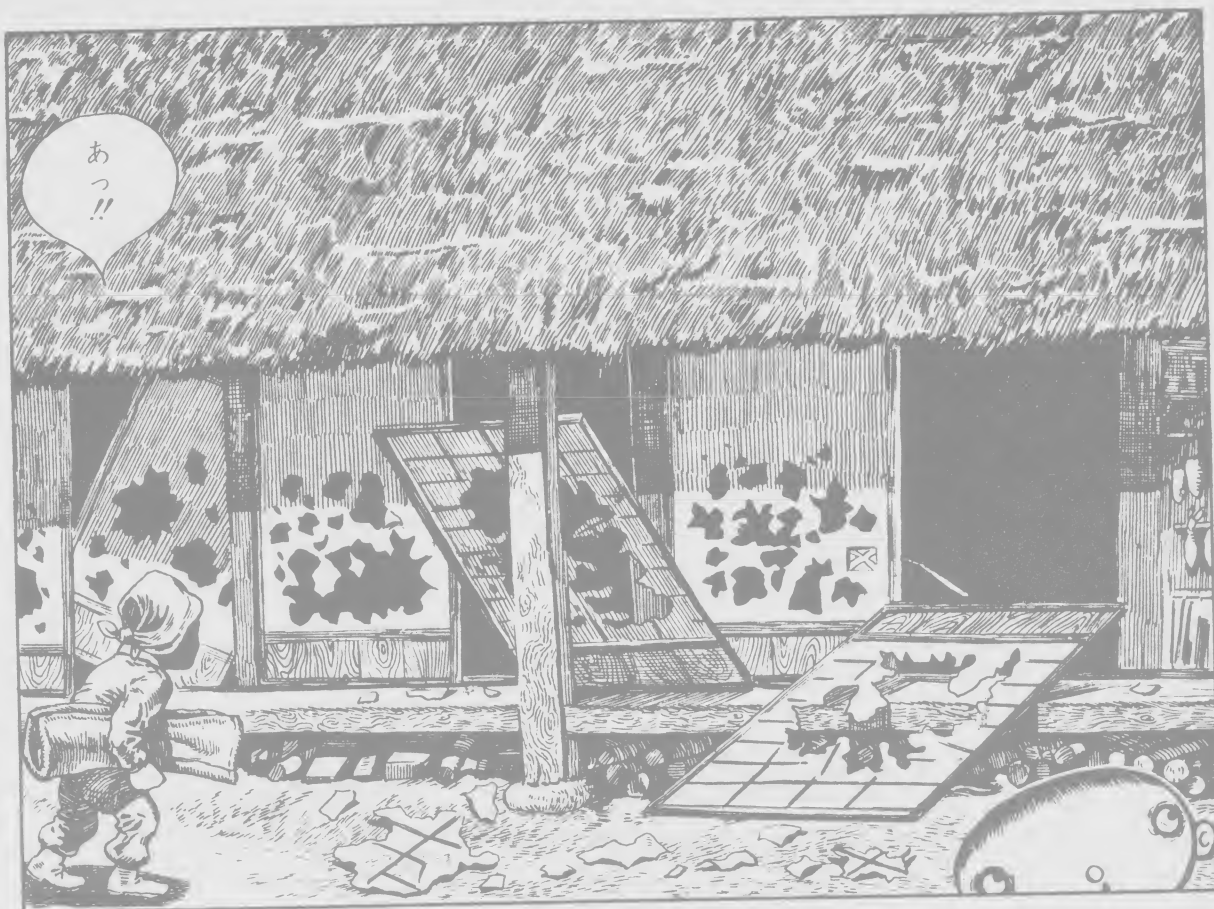
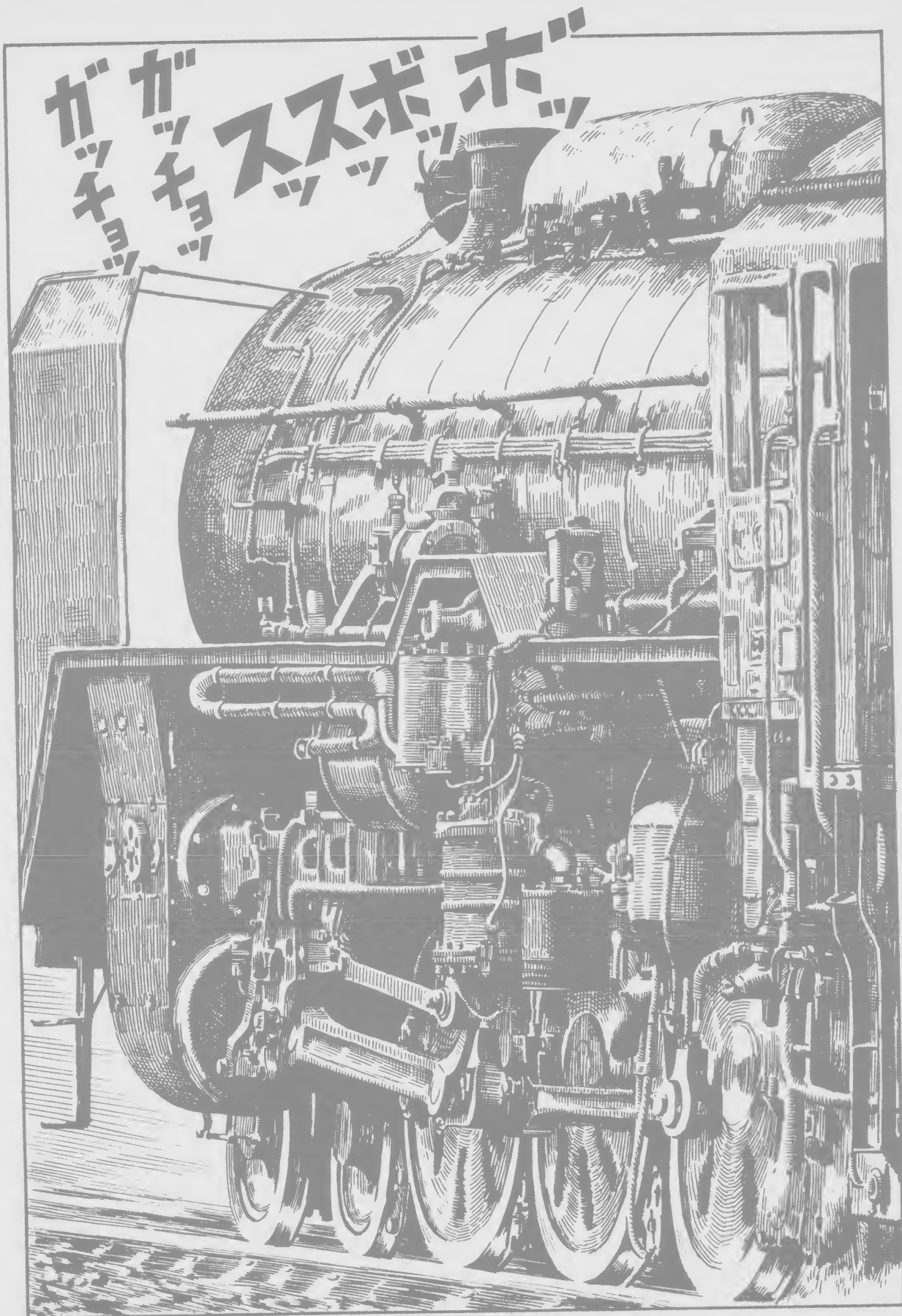
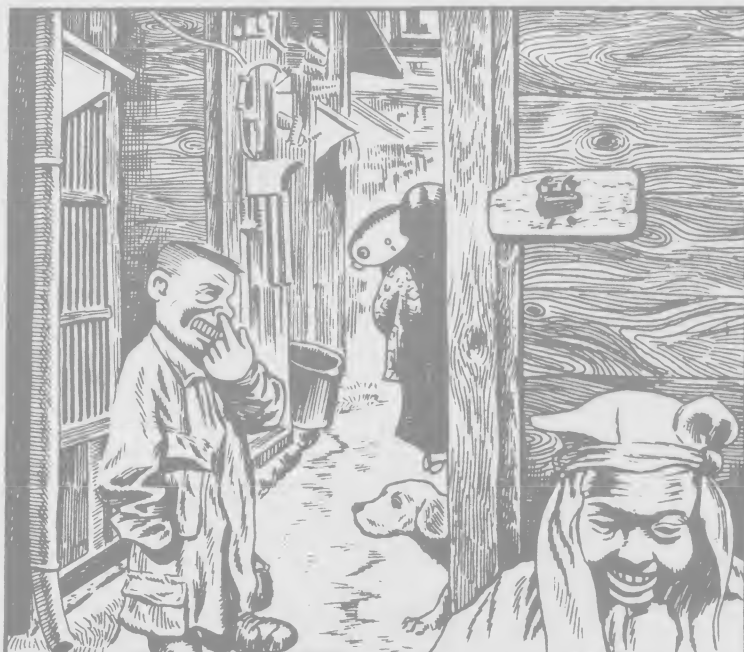
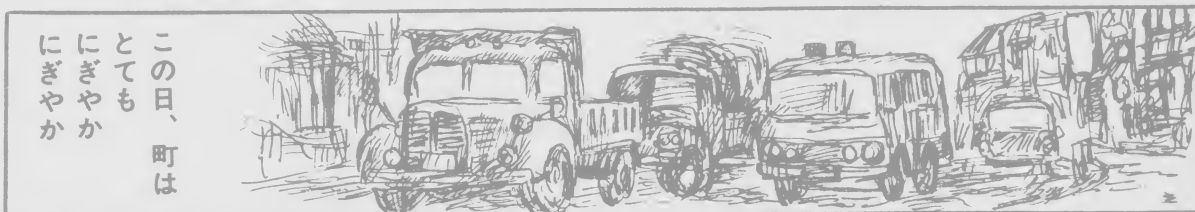
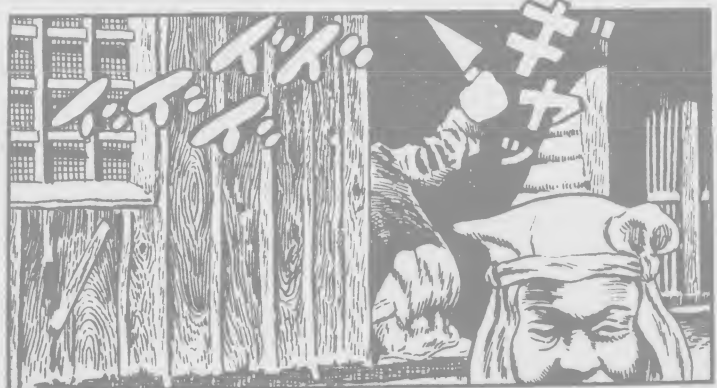
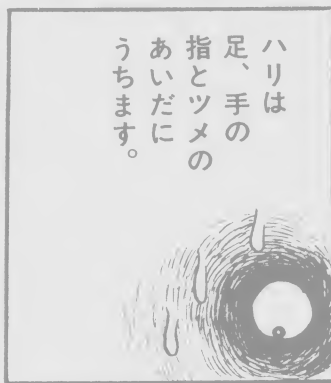
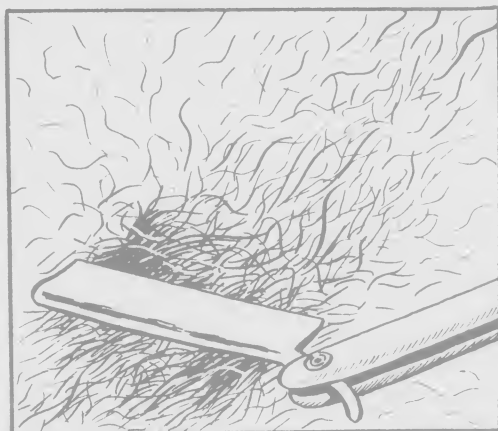
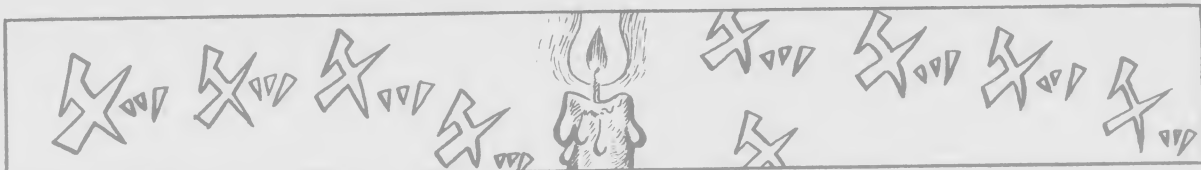
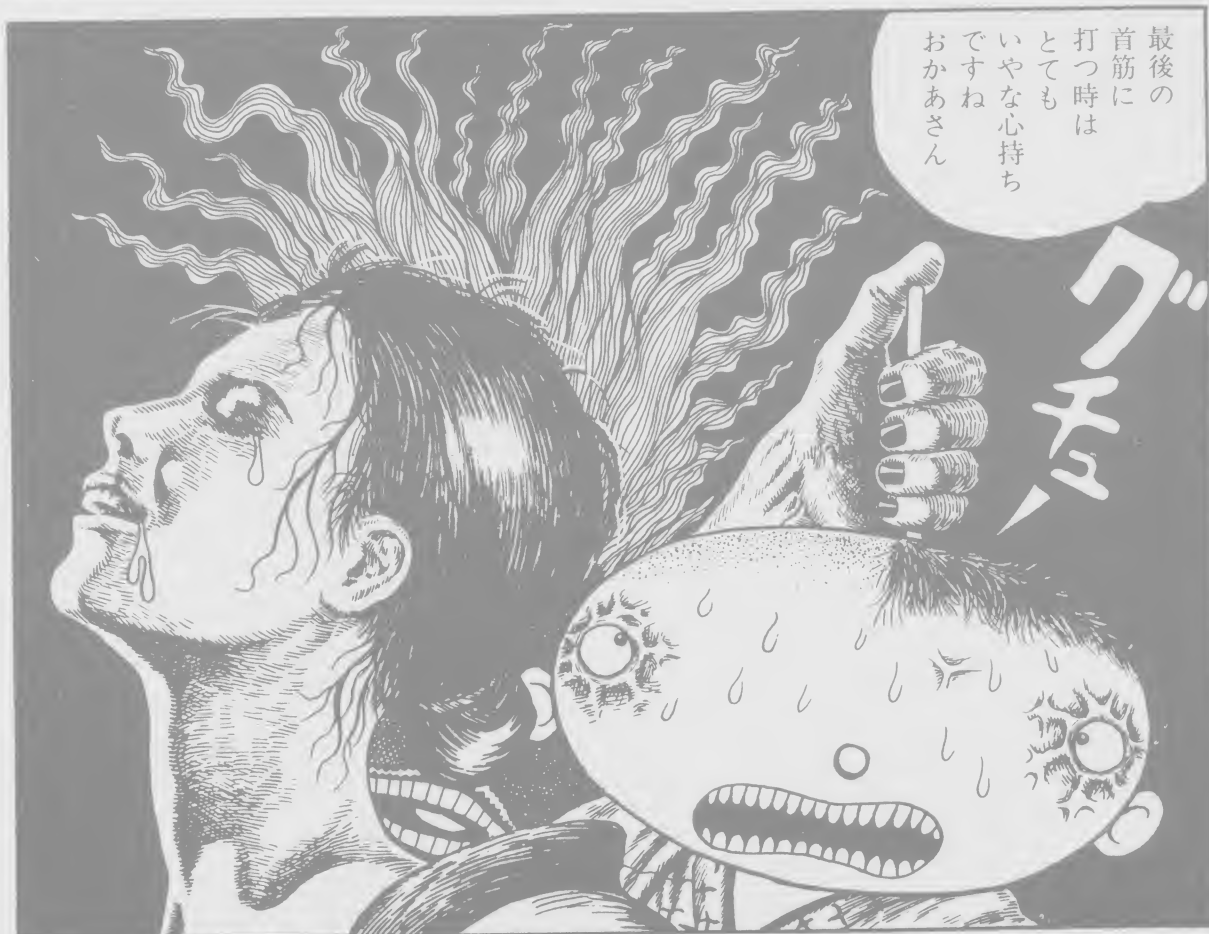
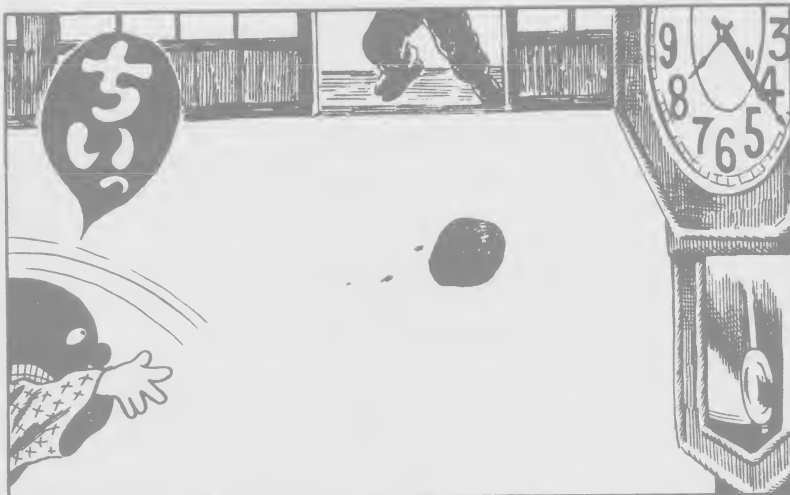
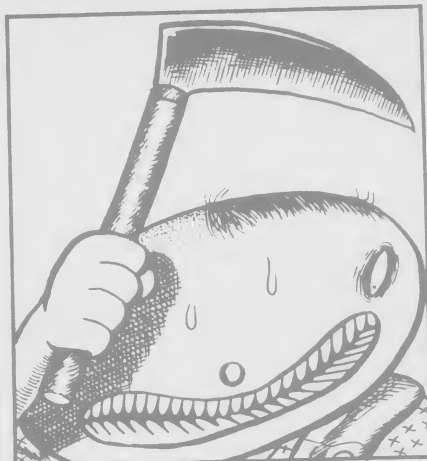
チッ
チッ
チッ
チッ
チッ

ちいっ

チ
ッッッ

ガラッ

1971. 3. 14

(ガロ1971年7月号掲載)

「のうしんぼう」（ガロ88年12月号）より

自分が初めてガロに投稿したのは83年だからもう今年で漫画家生活10年になる。

しかし偉そーに漫画家と言っても始めの2年は掲載してくれたのはガロだけ、よって収入はゼロ、アルバイトで飢えをしのいでいた。世間ではこーゆー人の事を漫画家とは言うまい。初めて単行本が出て印税という物を受け取った時は思わず目頭が熱くなった、あんまり安くて。それも旋盤工の月給程度の金額を御丁寧にも5分割で払って下さるのだ。商品としての自分の漫画の価値がいかに低いものであるかという事をつくづく思い知らされた。

それからSM誌とか土方向けエロ本なんかに描くようになりアルバイトをやめる。ところが不愉快な労働から解放され、やれ嬉しやと思ったのもつかの間、この手の零細雑誌はすぐ廃刊してしまうため、たちまち窮乏する。

家賃2万風呂無し共同便所の四畳半。あるのは醬油で煮しめたようなふとんと殺風景なスチール机だけ。ふとんは学生時代友人から貰ったもので、机はその友人と2人で大学から盗んだ物だった。（真昼間に堂々と運び出したら別に誰にも見咎められなかった）ガスも電話（漫画家の命綱）も止められ、コーヒーのお湯は電気炊飯器で沸かしていた。今思えばよく生きて来られたものだと自分でも感心するぐらい。

そんな荒廃した生活で自分は身も心も腐りはてていたが、どんなに惨めだろーが、どんなに落ちぶれはてよーが、二度と再び働きに出るよーな事はすまい、ほんの少しでも世間の方々のお役に立つよーな事はやるまいと秘かに心に誓っていた。そんな心がけのせいであろうか、その後もこの世界ではひたすら冷遇され続けた。自分の能力のうち評価されたのは多少絵が描けるという一点だけで、注文が来るのは明るいお色気物とかほのぼのサラリーマン漫画とか自分の性質とは縁もゆかりもないものばかりであった。

2、3年前ギガという漫画誌が創刊され、そこにルーキーリーグなる企画があった。数十人の新人漫画家が、秋元康とか高橋源一郎とかどーでもいーよーなやつらの審査の元勝ちぬき戦をやるというバカバカしい物であった。本物の新人ばかりだと内容が希薄になるので誰も知らない・・・・・よーなプロが何割かヤラセで雇われており、その一人が自分であった。担当編集者が「ウチはねえ、まとも・・・・・な商業誌ですから、ガロとかに描いてるよーなのは困りますから、なんかエッチな女子高生物とかそーゆーのを描いて下さいよ」と言うのでその通りの物を描いてやった。完全になめられてるなァと思いつつもギャラの小銭が欲しかったのだ。結果はわずか2回戦でブザマに敗退した。

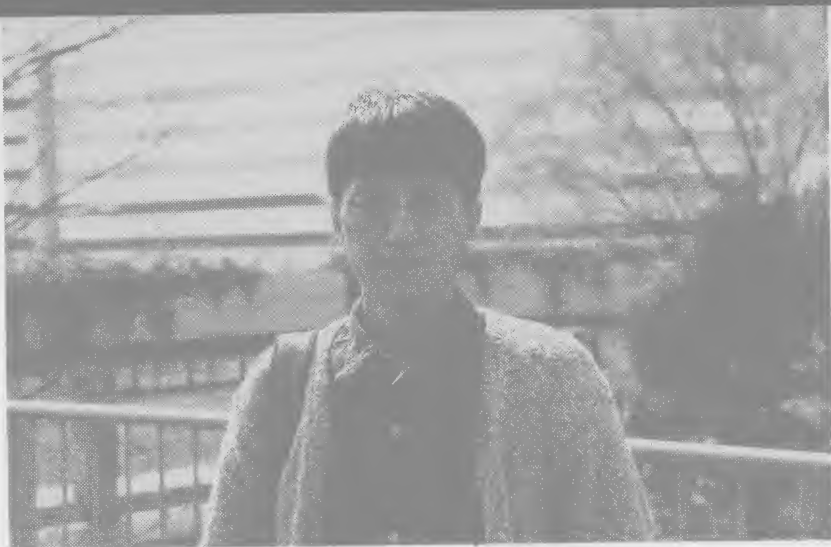
グランドチャンピオンという漫画誌の編集はめずらしく理解があり、最低限の規制はあるもののほとんど自由にやらせてくれた。うんうんこはいい会社じゃわいと思っていっしょうけんめい描いていたところたったの7回で打ち切りになった。7回すべてが読者の不人気投票No.1であったそーな。まあこの手の話を挙げれば枚挙にいとまがない。

自分の友人（日雇いガードマン32才）はこう言った「仕事とはそもそも不愉快なものだ。味あわされた苦痛や屈辱、そーゆーものの代価としてわずかな銭を受け取るのだ。」けだし真実であろう。そう思えば諦めもつくし何かこう安らかな気持ちになる。

個人的な実感としてはガロで描き続けていた事はペルーの通貨を貯金していたよーなものであった。それなりの満足があるにはあるが、他所のどこへ持って行っても通用しなかったし、時にはマイナスにすらなった。

ガロというのは何でも描かせてくれるがそれで食っていくのは不可能。普通の雑誌は拘束されるが金はもらえる。これから投稿して漫画家になろうというよーな人は、好むと好まざるに関わらずこの両極の間のどこかに自分の位置を見つけていかざるをえないという事を知っておいて損はないだろうと思う。

「"クシー君の発明"は自分の原点」

——鴨沢祐仁★インタビュー

——鴨沢さんは、75年に「クシー君の発明」でガロに入選しましたけど、持ち込みをされたんですよね。

鴨沢：雨が降ってる日でね。噂に聞いてた長井さんが入口の方の席にいて、見て貰ったら「あ、いいよ。」て、その場でOKという感じで。

——何故漫画を描こうと思ったんですか。

鴨沢：一番直接的に、触発されたというか、凄くショックを受けたのは、佐々木マキさんの「六月の隕石」。

——こういう作品を自分でも描いてみたいと。

鴨沢：こういう世界を、漫画で描いてもいいんだなと思って。世界が広がった感じでした。もの凄く短い話の中で、キッチリと完結していて堂々巡りをしている、作品自体が一つの宇宙模型みたいな感じがするんです。完璧に完成された一つの宇宙模型を見ている感じ。あの世界に惹かれました。後、（鈴木）翁二さんなんかも好きで、凄く影響を受けてますね。だから自分も描いてみようかな、という気になったのはマキさんとか、翁二さん辺りの影響かな。

一応「クシー君の発明」が処女作という事になってるんだけど、その前に20ページくらいの、いわゆるシュールなやつを描こうとしてたんだよね。当時「状況劇場」や「天井桟敷」みたいな、アングラ芝居が流行ってたでしょ。ああいうおどろおどろした世界を、もっとシュールに描いてみたらガロなら載せてくれるだろうと思って考えてたんだけど、1、2ページぐらい描いてそれっきりになってる（笑）。

——あの話は、やはり稲垣足穂の「一千一秒物語」を漫画化しようと。

鴨沢：「一千一齣物語」にしようかなと思って一千一コマ描こうとしたんだけど、どうも上手くいかなくて（笑）。それで構想をねっていると、何かイラストの羅列みたいになっちゃうのね。一千一には拘らずに、と思ったら4コマが出来たのかな。

——鴨沢さんは、マキさんに影響を受けた訳ですが、鴨沢さん登場以降の作家にポスト鴨沢さんみたいな作品がどんどん増えていった事を鑑みると、結構エポックメーキングな役割をしたんじゃないですか。

鴨沢：そうなのかな（笑）。

——入選作を今見てどう思います？自分が描いてきた中でも、好きな作品ですか。

鴨沢：そうですね、足穂が生涯、後から書いた物はみんな「一千一秒～」の解説の為の物だと言っている、そんな感じが分かりますね、おこがましいけど。「クシー君の発明」は自分の原点ですね。

——後に仕事はイラストが中心となって、イラストレーターという肩書に変っていきましたが。

鴨沢：基本的に描くのが遅いので、必然的にそうなってしまったんでしょうね。極端な話、漫画の一コマを描く時間で、イラスト一枚描けてしまう。ページ物を描くには、経済的にもしんどかったのかな。僕は一コマ描くのにも、もの凄く拘るんですよ。どんなに小さなコマでも一コマ一コマイラストを描くように構図を考えて。だから一コマ描くのにどうしても時間がかかるんです。

——根気のいる作業ですよね。

鴨沢：イラストだと一枚でまあとりあえず完結するから、そこでエネルギーを使い果してもいい訳だけど、コマ漫画だとエネルギーがなかなか持続しないんですね（笑）。

——それでは、今後の活動予定等を…。青林堂では現在単行本の制作が進行中ですね。

鴨沢：「クシー君のピカビアな夜」（7月上旬発売予定）ね。今年はデビュー当時のヤル気が戻ってきたんでね。18年振りに仕事に対するヤル気が出てますからね（笑）、今まではヤル気がなかったけど（笑）。イラストレーターじゃなくて、漫画家という肩書が付きますね。その第一弾が単行本に描き下ろすカラー8ページかな。

——鴨沢さんは足穂のように、「クシー君の発明」の解説を描き続けているとすれば、今度「クシー君のピカビアな夜」を描き下ろすのも、その一連の作業な訳ですね。

鴨沢：そうですね。後、今年は違う分野の漫画も描きますんで、よかったらガロにぜひ。

——違う分野というと…。

鴨沢：長井勝一賞を狙うんですよ（笑）。名前も変えるし、内容もクシー君路線じゃないんですね。今まで形を変えても、なんだかんだいって全部クシー君路線だったんですよ。それを離れた新分野です。

——以前話してくれませんでしたっけ、鉱石何とかというペンネームにするって。

鴨沢：蛍石鉱吉（ほたるいしこうきち）というペンネームなんです。蛍石さんが鴨沢さんと一番大きく違う所は、仕事が早いという事ですね（笑）。

（'93・4・13収録）